



Title	『人間キリスト記』から「駈込み訴へ」へ：その受容のあり方を探る
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2014, 5, p. 93-108
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97202
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『人間キリスト記』から「駄込み訴へ」へ

——その受容のあり方を探る——

長 原 し の ぶ

一、「駄込み訴へ」から探る聖書への関心

太宰治の「駄込み訴へ」(『中央公論』一九四〇・二)は、『女の決闘』(二九四〇・六、河出書房)に「女の決闘」「古典風」「誰も知らぬ」「春の盗賊」「走れメロス」「善蔵を思ふ」と共に収載され、その後、月曜荘から『駄込み訴へ』(一九四一・二)として刊行される。

「駄込み訴へ」が『女の決闘』の中に含まれることについて、三上秀吉は「女の決闘」に集められた七編は、紅潮して、口への字にゆがめた太宰治が「ダマスクスはまだ遠い」と叫びつつ、赤裸で走つてゐる勇ましい姿⁽¹⁾をそこに捉える。そして、宮田茂子は「駄込み訴へ」と「女の決闘」を貫くものを「劣等感」と「罪障感⁽²⁾」とする。確かに、『女の決闘』七編に探る作品的な特徴の繋がりも重要な視点ではあるが、『女の決闘』からその間を置かずに「駄込み訴へ」が改めて単行本『駄込み訴へ』と

して出版された点は看過できない。言うまでもなく、「駄込み訴へ」はユダとイエスの物語である。従つて、その出版背景にはこの時期における太宰のキリスト教への関心の深さが窺えるのではないか。

「駄込み訴へ」が発表され、単行本として刊行された一九四〇(昭和一五)年から一九四一(昭和一六)年の太宰作品には多くの聖書引用が確認できる。斎藤末弘氏⁽³⁾の調査によると、一九四〇年は三五箇所でその引用度数はどの年と比較しても突出して多く、一九四一年は一〇箇所で引用度数は六番目に位置する。もちろん、一九四〇年は聖書を題材にした「駄込み訴へ」の存在が大きく、その引用度が高くなるのは当然であろう。しかし、その他にも同年の「鷗」「善蔵を思ふ」「古典風」「女の決闘」には聖句引用が認められ、さらに、その時期に続く、一九四二(昭和一七)年は一九四〇年に次ぐ聖書引用度数となっている。つまり、一九四〇年から一九四一年は、太宰がキリスト

教への関心を高め、意識的に聖書を利用したといえる。その中で、「駄込み訴へ」は発表され、単行本化されたのである。作品「駄込み訴へ」を読み解くことにより、この時期の太宰のキリスト教への接近のあり方、聖書理解の一端を考察する。

二、「人間キリスト記」と「駄込み訴へ」の比較

聖書をその題材とする「駄込み訴へ」であるが、太宰は聖書をどのように受容したのか。太宰の聖書理解に大きな影響を及ぼした一人が山岸外史である。そして、山岸は「聖書を購つて以来、約十年の間、自分は、ただ、ひとりの聖句愛好者として、文学作品を愛読するものの位置で、聖書を覗いてゐた」⁽⁴⁾。自身の聖書研究の成果を『人間キリスト記』（「コギト」一九三七・一二）一九三八・六発表。一九三八年二月、第一書房より刊行）として発表する。この『人間キリスト記』が「駄込み訴へ」に影響を与えていることはすでに多く指摘されている。その中でも、両作品の詳細な比較検討を行っているのが菊田義孝氏、田中良彦氏、木村小夜氏である。

菊田氏は、

『人間キリスト記』は昭和十一年から十二年にわたって執筆され、十三年中に諸般が出た。当然、太宰は衆に先んじて、この本の内容を熟知していたはずで、その中の特に「ユダの章」が、「駄込み訴へ」を書くに際しての太宰の意識に、

多少なりとも影を落としていたであろうことは想像に難くない。ただし、いま両者を読みかえてみると、その見方考え方においては一致点を見いだせても、表現様式にまで及ぶあらゆる相似を見いだすことはできない。おそらく太宰は山岸氏のユダ観を十分に吸収したうえで、完全に自分のものとしてユダ像を提出しているのである。しかし、それでいて、『人間キリスト記』の「ユダの章」の中に、「駄込み訴へ」のユダをどことなく彷彿させる点がいくつも見いだせることは、否み難い事実である。⁽⁵⁾（以下傍線長原）

と述べ、『人間キリスト記』の「ユダの章」に注目し、以下を「駄込み訴へ」との共通点と相違点とする。

共通点

- ・ユダを美しい顔の男としてイメージする
- ・ユダをリアリストとする
- ・ユダの実務能力をイエスが認めない

相違点

- ・イエスの中にマリヤへの恋愛感情を見て取ったことを最後の契機にユダが裏切りに踏み切る
 - ・ユダがイエスに二つの対立する感情（愛憎）を抱く点
- 「駄込み訴へ」がユダの訴えで展開することから、まずは『人間キリスト記』でユダが中心となる「ユダの章」に着目することとは重要である。ただし、『人間キリスト記』内での「ユダの

「章」はほんの一部に過ぎない。次に『人間キリスト記』の「目次」を挙げる。

序……………五	
耶蘇の生誕……………三九	
耶蘇の母マリヤ……………五五	
耶蘇の信仰……………七三	
耶蘇の出発……………一〇二	
耶蘇とヨハネの会見……………一一一	
耶蘇とヨハネの差異……………一四二	
最後の試み……………一五五	
悪魔……………一七〇	
なんぢ等、悔い改めよ。天国は、近づけり。……………一七八	
ペテロとアンデレ……………一八二	
耶蘇の布教……………一八九	
マグダラのマリヤ……………一九九	
マルタの妹マリヤ……………二一四	
ユダの章……………二二二	
耶蘇、弟子の足を洗ふ……………二四一	
ゲツセマノの園において……………二四五	
囚人耶蘇……………二六三	
十字架の耶蘇……………二七〇	
十字架について……………二八四	

全二九二頁からなる『人間キリスト記』だが、「ユダの章」はわずか一九頁にしか過ぎない。従って、「ユダの章」のみから「駈込み訴へ」への影響を探ることは難しい。

田中氏は、「周知のように「駈込み訴へ」はユダの裏切りを扱っているが、「人間キリスト記」には「ユダの章」なる一章があり、太宰の関心の示し方から考えて参考にしても何の不思議はないだろう。」とし、やはり「ユダの章」へ関心を寄せている。その上で、菊田論から発展させて次の点を指摘する。

「駈込み訴へ」と「人間キリスト記」の共通点は五点にまとめられる。

- (1) ユダが自己の現実処理能力がイエスから評価されないことを不満に持つ点。
- (2) イエスを理想主義者、ユダを現実主義者とする点。
- (3) イエスがマルタの妹マリヤに恋をしたとする点。
- (4) 最後の晩餐において、イエスがユダに一つまみのパンを与えたことが、ユダの憎しみの気持ちを強めたとする点。
- (5) ユダは商売に関係していた人物とする点。

氏の比較も基本的に「ユダの章」が中心となっているが、(3)のイエスの恋愛については、その典拠が「マルタの妹マリヤ」の章である。また、木村氏は「菊田・田中氏の指摘した対照的

な人間像の構図の周辺にさらに次のような表現上の類似点がある。(以下、「人間キリスト記」を「人間」、「駆け込み訴へ」を「訴へ」と略す⁸⁾)として、以下の箇所を提示している。

- ・「あの魔術に心惹かれ、耶穌を聖者と考へず、魔術師と考へ、その背後についていたものなのに相違ない。」(人間)「謂はば、私はあの人の奇蹟の手伝ひを、危ない手品の助手を、これまで幾度となく勤めて来たのだ」(訴へ)
 - ・「その火の心をもつて反抗し、その鋭い眼をもつて、人々を眺め、水のやうに冷静なその心で、弟子達を啓蒙し、女性に、始めて、優美な微笑と寛容とを与へてこれを慰れんでゐたのである。」(人間)「あの人はこれまで、どんなに女に好かれても、いつでも美しく、水のやうに静かであつた。いささかも取り乱すことが無かつたのだ。」(訴へ)
 - ・「銀三十枚で耶穌の肉体を売ることに、ユダは、ひとつの痛快味さへ考へることが出来た。金銭を笑つた耶穌を、金銭で嘲つてやりたい欲望に近かつた。」(人間)「いやしめれてゐる金銭で、あの人に見事、復讐してやるのだ。これが私に、一ばんふさはしい復讐の手段だ。ざまあみろ！」(訴へ)
- さらに、ラストで唐突に出てくる「鳥の声」もまた「人間キリスト記」に登場する。

「この足音に夜のねむりを破られた鳥の声が、高い空で、四つ五つとつづいた。羽音が梢をかすめて飛んだ。森のなかの静けさは、破られた。」(人間)「ああ、小鳥が啼いてうるさい。今夜はどうしてこんなに夜鳥の声が耳につくのでせう。私がここへ駆け込む途中の森でも、小鳥がピーチク啼いて居りました。」(訴へ)

確認すると、木村氏の『人間キリスト記』からの引用は、「ユダの章」(三)・「耶穌の信仰」(三)・「ユダの章」(五)からの指摘である。氏が、「ユダの章」を超えた『人間キリスト記』全体との比較を行い、新たに他の章との関わりを発見している点は重要である。とくに、従来、太宰の独自描写と受け止められ、その上でユダの揺れる内面や不安を写し取つたものと解釈されてきた「鳥の声」⁹⁾についても、『人間キリスト記』からの影響が指摘できる点は興味深い。氏はこの「鳥の声」について、「ゲッセマネの園において」(六)からの引用と考察しているが、さらに詳しく見ると、『人間キリスト記』の中にこの「鳥の声」に繋がる「鳥」がすでに登場している。その箇所を次に示す。

ただ、ペテロだけが、黙々として、耶穌の白衣の姿に従つた。ペテロは不思議にしづかな夜を感じてゐた。怪しい鳥の羽音に、耳を澄ませた。草むらに消へていつた不気味なもの音に、心をとられたこともあつた。人々の地を踏む裸

足の音は、乱れながら、はたはたと暗い森の中につづいた。
 (「ゲッセマネの園において」二)

以上のように、これまで「ユダの章」が中心に検討されてきた両作品の比較において、ユダの存在に引き摺られるのではなく、山岸から太宰に繋がる聖書理解という大きな流れの中で、より全体からの影響を見据える必要があると考える。「人間キリスト記」全体との比較検証を通して見えてくる新たな点を探りながら「駄込み訴へ」を捉えなおす。

三、ユダの訴えとイエスの言葉

『人間キリスト記』の中で「ユダの章」が注目されるのは、「駄込み訴へ」がユダの独白(訴え)による物語だという理由が大きく、そのため、イエス像を描いた他の章が見過されてきたといえる。確かに、ユダの語りは「独白体では全てが語り手」の主観にとどまり、客観的な事実・評価の基準が存在し得ない⁽¹⁰⁾というように全ての事象が一人の人間のフィルターを通している事実は無視できない。しかし、たとえユダの目(意識)を通じたものであつたとしても、「駄込み訴へ」の中には確かにイエスが存在する。そのイエス像の描かれ方に焦点を合わせること(「イエス物語」である『人間キリスト記』との関連を深める。「駄込み訴へ」においてイエス像は二種類の描かれ方をしている。一つは、聖書からの直接引用によるイエスの言葉から立

ち上がる姿である。そして、もう一つは、聖書の中のイエスの言葉をユダを通して間接的に示すことで浮かび上がる姿である。

①聖書からの直接引用

・「狐には穴あり、鳥には埕、されども人の子には枕するところ無し」それ、それ、それだ。ちゃんと白状してゐやがるのだ。

・「禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、」馬鹿なことです。

②聖書からの間接引用

・ふと、私の名を呼び、「おまへにも、お世話になるね。」さうおつしやつてくれて、

・あの人は薄くお笑ひになり、「ペテロやシモンは漁人だ。」と低く獨りごとのやうに呟いて、

・すると、あの人は、私のほうを屹つと見て、「この女を叱つてはいけない。」さう言ひ結んだ時に、

・境内にゐる大勢の商人たちに向ひ、「おまへたち、みな出て失せろ、」と甲高い声で怒鳴るのでした。

・あの人の息せき切つて答へるには、「おまへたち、この宮をこはしてしまへ、」といふことだつたので、

・あの人は、「ああ、私のすることは、おまへには、わかるまい。」と穏やかに言ひさとし、

・あの人は少し声を張り上げて、「私がもし、おまへの足を洗はないなら、」と随分、思ひ切るつた強いことを言ひました

ので、

・あの人も少し笑ひながら、「ペテロよ、〜」と言ひかけて、(略)

「みんなが潔ければいいのだが。」はツと思つた。

・実に蒼ざめた顔をして、「私がおまへたちの足を」ひどく物

憂さうな口調で言つて、

・ふつと、「おまへたちのうちの、一人が、私を売る。」と顔を

伏せて、

・あの人は死ぬる人のやうに幽かに首を振り、「私がいま、その人に一つまりのパンを与へます。」と意外にはつきりした

口調で言つて、

①は作中に二箇所確認でき、言葉自体に対するユダなりの感想は続くものの、ユダの台詞に繋がらない独立した言葉として描かれているのが特徴で、聖書の中でイメージされる「神の子」イエス像を強調する狙いがある。一方で、②の特徴はユダの話の流れの中にその言葉が取り込まれ、その言葉を述べた時のイエスの様子がユダを通して解釈されている。イエスの表情、感情が加わることにより、人間的なイエス像が浮かび上がる。

『人間キリスト記』が「人の子」「人間」としてのイエスを重視している点を鑑みれば、②はよりその背景に『人間キリスト記』との繋がりを窺わせる。これまでも、『人間キリスト記』との関わりを見ることなく、作品そのものからイエスが「人の子」として強調されていることが指摘されてきた。しかし、その背景に『人間キリスト記』の存在を置けば、「神の子」「人の子」と

されるイエス像はより鮮明なものとなつてその姿を現すと考えられる。

四―一、イエス像からの照射——聖書直接引用からの考察

①の聖書からの直接引用のイエスの言葉は『人間キリスト記』にも登場している。それぞれの解釈を比較する。

イエスの言葉①——聖書からの直接引用……「」内は「駈込み訴へ」、「」内は『人間キリスト記』

A「狐には穴あり、鳥には罅、されども人の子には枕するところ無し。」

『鳥に、罅あれども、人の子は棲むに家なし。』(『耶蘇とヨハネの会見』八)

『鳥に、罅あれども、人の子は棲むに家なし。』(『最後の試み』二)

B「禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは酒杯と皿との外を潔くす、然れども内は食欲と放縱とにて満つるなり。禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまざまの穢とに満つ。斯のごとく汝らも外は正しく見ゆれども、内は偽善と不法とにて満つるなり。蛇よ、虺の裔よ、なんぢらは争で、ゲヘナの刑罰を避け得んや。ああエルサレム、エルサレム、予言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、雌鷄のその雛を翼の下に集むること

く、我なんちの子らを集めんと為しこと幾度ぞや、然れど、汝らは好まざりき。」

『禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは酒盃と皿との外を潔く拭ふことのみを知れり。然れど、心の内、貪欲と放縱とに満つ。盲目なる者、パリサイ人よ。汝等、先づ、酒盃の内を潔めよ。然らば、やがて、外部も神の如く清くならん。』〔耶穌の母マリヤ〕三

『禍害なるかな。偽善なる学者、パリサイ人よ。汝等は、白く塗りたつ墓に似たり。外は美しく見ゆれども、内は、死人の骨と、さまざまなる穢と汚濁に満つ。』『禍害なるかな。偽善なる学者、パリサイ人よ。汝等は、人の前に天国を閉して、自ら入らず、入らんとする人をも入らしめず。』『この故に視よ。之に依りて、義人アベルの血より、聖書と祭壇との間に、汝らが殺ししザカリヤの紅き血に到るまで、地上にて流したる正しき血は、皆、汝等に報い來たらん。誠に真に、汝等に告ぐ。これ等の事は、必らず、今の代に於て報はるべし。』『ああ、エルサレム、エルサレム、預言者達を殺し、遣はされたる人々を、石にて撃つ者よ。』『視よ、汝等の家は荒廢れて、汝等に、醜惡そのままに遣らん。』〔耶穌の出發〕七

Aは「マタイ伝八章二〇節」の利用である。それぞれ、作中においてどのような解釈がなされているかを確認する。

「駢込み訴へ」の解釈（ユダ）

それ、それ、それだ。ちやんと白状してゐやがるのだ。ペテロに何が出来ますか。ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、トマス、痴の集り、ぞろぞろあの人について歩いて、背筋が寒くなるやうな、甘つたるいお世辭を申し、天国だなんて馬鹿げたことを夢中で信じて熱狂し、その天国が近づいたなら、あいつらみんな右大臣、左大臣にでもなるつもりなのか、馬鹿な奴らだ。その日のパンにも困つてゐて、私がやりくりしてあげないことには、みんな飢ゑ死してしまふだけぢやないのか。私はあの人に説教させ、群衆からこつそり賽錢を巻き上げ、また、村の物持ちから供物を取り立て、宿舎の世話から日常衣食の購求まで、煩をいとはず、してあげてゐたのに、あの人はもとより弟子の馬鹿どもまで、私に一言にお礼も言はない。

「駢込み訴へ」では、ユダは現実的視点に立つて、〈ねぐら〉を人間生活を成立させる基本である衣食住と考え、イエスの生活を支える存在としての自己を自覚し、それを認めてもらえないことに苛立っている。そして、ここでは、他の弟子と自分を執拗に比べ、その違いを主張している。

「人間キリスト記」の解釈

・ここにどんな人間でも、『完全な独創』が許されない世界

がある。『完全純粹な獨創』を覗つた人間は、必らず、失敗する。それは、不可能な事といふよりも、寧ろ、あり得ない世界の事だからである。人間は、互ひに影響しあつてゐるものだ。嬰兒のやうな少年の言葉と雖も、また、老爺の言葉と雖も、耳を澄まして傾聴しないではゐられぬ理由がここにある。そこには、必らず、何かがある。その何かを、更に、拾ひ集める。さうして、人間は、次第に、自らを『立体化』してゆく。『実体化』する。巢をつくる。聡明な耶蘇は、もとより、一層、進んで、さうした形をとつた。『鳥に、嗚あれども、人の子は棲むに家なし。』と、その苦悩の心境を語つた耶蘇と雖も、発狂者でない限り、かうした嗚をもつてゐたのである。寧ろ、大きな嗚を持つてゐた。愛の手を持つてゐた。その愛の手の中で、耶蘇は、ヨハネの言行からいろいろのものを奪つていつたのである。耶蘇は、秘やかに、ヨハネに耳を澄ましてゐたと言つてよい。人は、奪へるだけ奪つた方が自然である。それでなくとも、虚無の耶蘇には、他人の血と肉とが必要であつた。〔耶蘇とヨハネの会見〕
八)

『鳥に、嗚あれども、人の子は棲むに家なし。』それほど、耶蘇の不安と苦悩は大きかつた。かへつて、安心と信仰の上に生きてゆくことが出来難かつたのである。むしろ、その故に、耶蘇は、神に祈り、詩を叫んだ。すべて、不

安と苦悩、瞋恚と憎悪、愛情から生れた言葉である。ただ、耶蘇は、弱い心に鞭をうちながら、虚無と戦ひ、一歩一歩、動かない心の世界へはいつていつた。純粹な信仰を得るために悩みつづけた。〔最後の試み〕一)

『人間キリスト記』ではイエスにとつて〈ねぐら〉は精神的な要素で解釈され、それを埋める存在として弟子のヨハネが描かれる。『駢込み訴へ』で「あの人は、私の師です。主です。けれども私と同じ年です。三十四であります。私は、あの人よりたつた二月おそく生れただけなのです。」とされるユダとイエスの年齢に関して、『人間キリスト記』では、「また、ヨハネは耶蘇と同年であつたらしい。違つても一歳と違はない。」〔耶蘇とヨハネの会見〕一)となつてゐる。つまり、『人間キリスト記』では、信仰(神)を求めるイエスから特別な信頼と繋がりを寄せられるのはヨハネである。これに対して、『駢込み訴へ』は、ヨハネを他の弟子と同列に扱つてゐる。これは、『駢込み訴へ』においてイエスの信仰に重要なのは他のどの弟子でもなく、ユダの存在であることを示そうとしたといえるのではないか。そのことをより顯著に指し示すのがBの引用である。

Bは「マタイ伝(二三)二五章三七節」を利用している。聖書の中でも「神の子」とされるイエスの行動、言葉としては疑問の持たれる箇所である。それぞれの解釈を確認する。

「駈込み訴へ」の解釈(ユダ)

もはやこの人は駄目なのです。破れかぶれなのです。自重自愛を忘れてしまつた。自分の力では、この上もう何も出来ぬといふことを此の頃そろそろ知り始めた様子ゆゑ、あまりボロの出ぬうちに、わざと祭司長に捕へられ、この世からおさらばしたくなつて来たのでありませう。私は、それを使った時、はつきりとあの人を諦めることが出来ました。さうして、あんな気取り屋の坊ちゃんを、これまで一途に愛して来た私自身の愚かさをも、容易に笑ふことが出来ました。やがてあの人は宮に集る大群の民の前にして、これまで述べた言葉のうちで一ばんひどい、無礼傲慢の暴言を、滅茶苦茶に、わめき散らしてしまつたのです。左様、たしかに、やけくそです。私はその姿を薄汚くさへ思ひました。殺されたがつて、うづうづしてゐやがる。「略」馬鹿なことです。噴飯ものだ。口真似するのさへ、いまはしい。たいへんな事を言ふ奴だ。あの人は、狂つたのです。まだそのほかに、饑饉があるの、地震が起るの、星は空より墜ち、月は光を放たず、地に満つ人に死骸のまはり、それをついばむ鷲が集るの、人はそのとき哀哭、切齒することがあらうだの、実に、とんでも無い暴言を口から出まかせに言ひ放つたのです。なんといふ思慮のないことを、言ふのでせう。思ひ上りも甚しい。ばかだ。身のほど知らぬ。いい気なものだ。もはや、あの人の罪は、まぬかれぬ。

必ず十字架。それにきまつた。

「駈込み訴へ」では、子供のように喚き散らすイエスを「この世からおさらばしなくなつてきた」「殺されたがつてゐる」とし、これがユダの「必ず十字架」という訴えの行為へと繋がる。

『人間キリスト記』の解釈

・けれども、耶蘇は、或る『時刻』から後、『十字架』の当然来たるべきことを知つてゐた。一秒、一秒、追つてくる運命を知つてゐたのである。唯、『信仰』の上に、進んでいつた。自分は、耶蘇を、かうした純粋行動の人だつたと考へてゐる。(略) 耶蘇は、精神主義者であつたから、すべて、内面から心を完成してゆかうとする方針をとつてゐた。従つて、こんな言葉で、時代の学者、先人共を非難してゐた訳だが、誰ひとりとしてこの偽りのない行動と純粋な言葉とを信じ得るものはなかつたのである。それ程、耶蘇みづからは、『真実』と『純粋』であつた。

〔耶蘇の母マリヤ〕(三)

・耶蘇は芸術家の常として、何時も、人生に刺戟を求め、心の花を愛し、神の暴風雨に叫び、地上の収穫に喜悅した。喜怒哀楽の強い人間であつた。寧ろ、そこには、律しい人間の尺度がなかつたと言つてもいい。天才といふものは、何時も、必らず、常識を無視して、ひと

つの信仰に生きてゆくものだが、耶穌の心といふものも、明らかに、こんな形で、『刹那の詩』を絶叫してゐたのである。(略) 耶穌は激しくと、こんな絶叫の声を放つて、諸人に瞋恚の詩を投げつけたのだが、さういふ情熱の多い耶穌が、このヨハネからの洗礼の時も、また、それ以後に於ても、何時も、必らず、ヨハネだけは、敬意を表してゐた。また、擁護し、庇護してゐた。(「耶穌の出發」七)

・首都エルサレムの一週間のうちに、耶穌は、かねて期してゐたやうに、自分が、異教徒として最後をとげなければならぬことを、むしろ胸の中で、諳んじてゐた。事実、耶穌は、果敢にも、神の宮を犯して、その前門の商人達を追ひはらひさへした。時代の人々からみれば、狂人の類ひと思はれるやうな暴行さへ取へてした。『我が家は、もろもろの国人の家と称へらるべきに、汝等、この宮を強盗の棲家となす。』耶穌の言葉をもつてすれば、この神殿は、『我が家』である。然るにお前達商人は、神の心を知らず、ただ、この宮を商売をする場所にしてゐる。耶穌は、神の名を犯したといふことさへ出来よう。その上、耶穌は、皮の鞭をふるつて、商人を追ひ払つた。また、首都エルサレムの宮仕へ達に、神の心を説き、完膚なきまでに、時代の長老を警めた。耶穌のエルサレムに於けるこの働きは、暴中の暴、悪中の悪といふのに近

かつた。耶穌は、獅子奮迅の勢をもつて、自分の所信を貫徹したのである。その結果が、どんな形で現れるか、耶穌でなくとも推知するのに難くはあるまい。耶穌は、ただ、その時刻の到るのを待つてゐたといふより他はない。従つて、耶穌は、最後の晩餐の席上で、ちらりと、ユダを瞥見しただけで、すでに、ユダが、耶穌を裏切る準備をしてゐることを直観してゐたのである。(「ユダの章」五)

『人間キリスト記』においても、実はイエスは「十字架」に進んでいたとされ、それを待つていたとされる。Bの「マタイ伝二三―二五章三七節」については、橋本滋男氏が「全体としてイエスの発言に由来するものではないと考えられる」「著者マタイがユダヤ系キリスト教徒の資料を用いてまとめた文であると言へる」と指摘するように、イエスの発言に由来するものではなく、宗教対立を背景においた中でまとめられたものだろう。それをイエスの言葉として両作品は利用している。そこには、「十字架」(死)をのぞむイエスの信仰の形が現れているといえ、とくにそこに直接関与していくユダが、ヨハネを退けた「駈込み訴へ」ではとくに焦点化される。「十字架」は『人間キリスト記』では「十字架によつて、みづから、証明した」「自分を他殺した」「自分を十字架した」「十字架について」(二)とあり、イエスが求める信仰の結実(証明)と意味付けられてい

る。従って、イエスを死に追いやるユダの訴えが描かれた「駄込み訴へ」におけるユダの役割と重要性は他の弟子とは比較できないほど大きくなるのだ。このイエスの信仰のあり方とユダの役割が太宰の聖書理解の根本にあるといえる。

以上のことから「駄込み訴へ」でユダが主張するほどにイエスはユダと対立し、嫌悪していたわけではないことが窺える。それは、「神の子」として真摯に神を仰望するイエスの信仰の結実においてユダの存在が必要不可欠であることを理解していたともいえよう。ただし、ユダとイエスは相容れることはなく、だからこそ十字架（死）は用意される。

四―二、イエス像からの照射――聖書間接引用からの考察

次に、「二」の②で確認した聖書からの間接引用であるイエスの言葉のそれぞれの解釈を比較する。

イエスの言葉――聖書からの間接引用……」「内は「駄込み訴へ」、『内は「人間キリスト記」の表記

（一）「おまへにも、お世話になるね。おまへの寂しさは、わかつてゐる。けれども。そんなにいつも不機嫌な顔をしてゐては、いけない。寂しいときに、寂しそうな面容をするのは、それは偽善者のすることなのだ。まことに神を信じてゐるならば、おまへは、寂しい時でも素知らぬ振りして顔を綺麗に洗ひ、頭に膏を塗り、微笑んでなさるがよい。わからないかね。寂しさを、人にわかつて貰はなくても、どこか眼に見

えないところにあるお前の誠の父だけが、わかつてゐて下さつたなら、それでよいではないか。さうではないかね。寂しさは、誰にだつて在るのだよ。」

『（引用なし）』

（一）は、「人間キリスト記」に同様の箇所は確認できない。しかし、「おまへの寂しさは、わかつてゐる」というユダに対するイエスからの愛情めいた心情は「人間キリスト記」の次の箇所に窺える。

或る日、耶穌は、ユダとこんな会話をしたことがある。ユダの眼を眺めて微笑しながら、『お前は、神になりたいと思ふか。』と訊いた。ほかの弟子であつたならば、みな、謙虚に自分を否定するだらうに、ユダのみは臆するところなく、満面で、卑しく笑いひながら、『出来ることなら、神様になりたいと考へます。』と応へた。きはめて素朴に、きはめて無邪気に答へた。むしろ、純粹にこたへたといつてもいい。嘘も、偽りもなく、そんな欲望をもつてゐたからである。

そこで、耶穌は、つづいて尋ねた。心の中で、ユダのこの欲望の果てしなさと、その素朴な願望とを、面白いと考えへてゐた。『ユダの章』三

このイエスとユダの心の交流は「駄込み訴へ」で「あなたにさへ、わかつてもらえたら」というユダの愛に繋がる。ただし、

その愛は共有されることはなく、反動として対立する関係性を生み出し、イエスを十字架へ導く。

(二)「ペテロやシモンは漁人だ。美しい桃の畠も無い。ヤコブもヨハネも赤貧の漁人だ。あのひとたちには、そんな、一生を安楽に暮せるやうな土地が、どこにも無いのだ。」

『もつとも、使徒の中には、様々な人物がゐたやうにも思はれる。自分は、傲岸な人物、奇怪な人物、不屈な人々、不逞な人間、けれども、生粋な信仰と真実のみに生きやすい傾向のある人物を耶蘇が集めたやうに思つてゐる。妥協性の少ない、むしろ、偏屈な、けれども、また、真に愛し得る面白い心の人間を集めたと思つてゐる。(略)『私は、先刻からお前を見てゐた、私には、お前のことがよく解る。お前の未来もお前の過去も、みな、よく解る。お前は好い男だ。立派な人間だ。私は、お前が好きだ。私と一緒に来ないかね。私は、お前に、もつとよい仕事を与へるだらう。立派な仕事だ。』それから、語をきつて、『人を漁る仕事だ。ほんとに立派な仕事なのだ。』(略)『マタイ伝には、そんな形に書いてある。耶蘇は、忽ちの間に、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、四人の漁夫を自分の弟子にしてゐる。』「ペテロとアンデレ」

イエスとユダの埋められない距離は(二)のイエスの言葉に表れている。「駈込み訴へ」では、ユダがイエスに「つつましい民のひ

とり」となることを願う場面である。ユダが「薄く笑ひ」「低く」呟いたと感じたイエスの言葉には冷ややかな感情が漂う。

その背景には、「耶蘇が単なる男の生活者ではなく、仕事のために生きてゐる人間」(『人間キリスト記』『マグダラのマリヤ』二)であることの自負とそれを理解しないユダへの苛立ちが見て取れる。ユダは最後まで自分と同じ地点に立つ存在として、現世の中のイエスを求めるが、イエスは自身の信仰の完成を求める。漁師のペテロを弟子にする場面で強調される「もつとよい仕事」「立派な仕事」がそれを証明している。

(三)「この女を叱つてはいけない、この女のひとは、大変いいことをしてくれたのだ。貧しい人にお金を施すのは、おまへたちには、これからあとあと、いくらでも出来ることではないか。私には、もう施しが出来なくなつてゐるのだ。そのわけは言ふまい。この女のひとは知つてゐる。この女が私のからだに香油を注いだのは、私の葬ひの備へをしてくれたのだ。おまへたちも覚えて置くがよい。全世界、どここの土地でも、私の短い一生を言ひ伝へられる所には、必ず、この女の今日の仕事も記念として語り伝へられるであらう。」

『(引用なし)』

「駈込み訴へ」では「青白い頬は幾分、上気して赤くなつて」いるイエスの表情が描かれる。

ここにユダはイエスの恋愛感情という生々しい姿を垣間見る。

人の子イエスという自分と同じ次元の存在を感じるからこそ、ユダの心は愛憎入り乱れる形をとり、一貫しない。イエスのあり方に戸惑いながら愛情を高めていく。このイエスの恋愛譚は『人間キリスト記』でマルタの妹のマリヤがイエスの頭から香油を注ぐ場面、「その時の耶穌の言葉は、一見すれば、極めて正しいものであり、人間の本能を表現してゐるものとは思はれないが、しかし、その前後の経緯を注意深く読んでゆくと、耶穌が、きはめてこの女性に対して、優しい愛情を注いでゐたことむしろ、耶穌が、このマリヤを、心から好いてゐた模様が理解されてくるやうに考へられる。自分は、それを、耶穌も恋をしたといつていいやうに思ふ。むしろ、どんな聖域に入つても、好悪の感情が、抹殺されるものではないこと。耶穌も、立派に感情で動く人間であつたことなど理解するよりほかない。」(「マルタの妹マリヤ」二)を踏襲するといえる。

(四)「おまへたち、みな出て失せろ、私の父の家を、商ひの家にしてはならぬ。」「おまへたち、この宮をこはしてしまへ、私は三日の間に、また立て直してあげるから。」

『我が家は、もろもろの国人の家と称へらるべきに、汝等、この宮を強盜の棲家となす。』(「ユダの章」五)

(四)におけるイエスの暴言・暴挙の様子を「駈込み訴へ」のユダは次のように語る。

・思ひ上がりも甚だしい。ばかだ。身のほど知らぬ。いい気なものだ。もはや、あの人の罪は、まぬかれぬ。必ず十字架。それにきまつた。

・もはや猶予の時ではない。あの人は、どうせ死ぬのだ。ほかの人の手で、下役たちに引き渡すよりは、私が、それを為さう。けふまで私の、あの人に捧げた一すぢの愛情の、これが最後の挨拶だ。私の義務です。私があの人を売つてやる。つらい立場だ。誰がこの私のひたむきな愛の行爲を、正当に理解してくれることか。いや、誰に理解されなくてもいいのだ。私の愛は純粹の愛だ。人に理解してもらふ愛では無い。

ユダがイエスを売る行為を自分にしかなし得ない「愛」と「義務」と捉えている点は興味深い。この背景には、『人間キリスト記』の「首都エルサレムの一週間のうちに、耶穌は、かねて期してゐたやうに、自分が、異教徒として最後をとげなければならぬことを、むしろ胸の中で、諳んじてゐた」「耶穌は、ただ、その時刻の到るのを待つてゐたといふより他はない」(「ユダの章」五)という解釈がある。イエスにとつての十字架の意味を『人間キリスト記』では、「信仰とは、はじめて、血と十字架によつて獲得されるあの真実ではあるまいか。」(「ゲツセマネの園において」五)とし、信仰の完成と捉えている。つまり、「駈込み訴へ」のユダの行動(訴へ)は「愛しているがら、その相手

をどうしても許すことが出来ない」〔裏切〕りの結果ではなく、イエスの信仰そのものを完成させる必要絶対条件としてあることが分かる。

(五)「ああ、私のすることは、おまへには、わかるまい。あとで、思ひ当ることもあるだらう。」

「私もし、おまへの足を洗はないなら、おまへと私とは、もう何の關係も無いことになるのだ。」

「ペテロよ、足だけ洗へば、もうそれで、おまへの全身は潔いのだ、ああ、おまへだけでなく、ヤコブも、ヨハネも、みんな汚れの無い、潔いからだになつたのだ。けれども、」

「みんなが潔ければいいのだが。」

『我がなすことを、汝、いまは知らず、後に悟るべし。』『我、もし、汝を洗はずば、汝、我となんら關係もなし。』『すでに浴したるものは、足のほか洗ふこと要せず。全身きよきなり。』〔耶穌、弟子の足を洗ふ〕

(五)で弟子の足を洗う場面のイエスを「駈込み訴へ」のユダは、「苦痛に耐へかねるやうな、とても哀しい眼つき」と表現し、自分がイエスを売ろうとした「暗い気持」を見抜かれたと考える。しかし、イエスが十字架を望み、その運命を予見していたとすれば、自身の来たるべき死を前にした人間らしい感情といえる。それを最後までユダは自分に引き寄せて解釈しようとしている。そこには、自分こそがイエスと繋がり続けるべき者だという自

負心が窺える。

(六)「私がおまへたちの足を洗つてやつたわけを知つてゐるか。

おまへたちは私を主と称へ、また師と称へてゐるやうだが、それは間違ひないことだ。私はおまへたちの主、または師なのに、それでもなほ、おまへたちの足を洗つてやつたのだから、おまへたちもこれからは互ひに仲好く足を洗ひ合つてやるやうに心がけなければなるまい。私は、おまへたちと、いつ迄も一緒にゐることが出来ないかも知れぬから、いま、この機会に、おまへたちに模範を示してやつたのだ。私のやつたとほりに、おまへたちも行ふやうに心がけなければならぬ。師は必ず弟子より優れたものだから、よく私の言ふことを聞いて忘れぬやうにしないさい。」

『われ、汝等に模範を示せり。わが為しし如く、汝等も為さんがためなり。』『われ、新しき誠命を汝等に与ふ。なんぢ等相愛すべし。わが、汝等を愛せし如く、汝等も、相愛すべし。』

(六)は(五)と同様、人間として死を目前に平静ではいらぬイエスが表されている。「駈込み訴へ」では、「ひどく物憂さそうな口調」のイエスとある。『人間キリスト記』では、「耶穌は、最後の晩餐の席上で、『人の師』として説くべき言葉は、みな、美しく、雄々しく説きはなつた。けれども、人間として、明日、生命の奪はれる道、十字架にのぼることには、内心、流石に耐へ

がたい懊悩があつたことをゲツセマネの園で示してゐる。」とあり、耶蘇の「高い祈りと絶叫にみちながら、その反面が、意外なほど『弱さ』を露はしてゐる」性格を捉え、「表面の強がりよりも、裏面の悲しさと懊悩の深さに、いつか、人は、最高の『心理美』と、『懊悩美』とをみる。耶蘇こそ、裏面から眺め、裏面の心弱さにうたれるべき人間ではあるまいか。」(「ゲツセマネの園において」一)と結論付ける。

(七)「私がいま、その人に一つまみのパンを与へます。その人は、ずるぶん不仕合せな男なのです。ほんたうに、その人は、生れて来なかつたはうが、よかつた。」

『(引用なし)』

最後のイエスの言葉である(七)に注目すれば、ユダを付き離し、批難している強い言葉と受け取れる。ユダの生を否定する言葉は、『人間キリスト記』ではユダ自身がイエスを売った後に到達する「はじめて、自分が生を得たことが誤りであることを悟つた。」(「ゲツセマネの園において」六)という認識である。それを「駄込み訴へ」ではイエスから発信させている。

しかし、「駄込み訴へ」において、イエスはユダと進みべき方向の異なる点は述べているが、ユダの存在自体を否定したり、個人的な憎しみを抱いてはいない。むしろ、ユダが自分の求める道に必要なことを悟っている。従つて、(七)の最後の言葉は、そのようなユダの存在を理解した上での発信といえる。ユダの

語るイエスを売ることが「義務」という誰にも理解されない行為の意味をイエスだけは意味あるものと捉え、それをなし得なければならぬ立場に対してその生を憂う姿勢を見せたと解釈することも可能だ。

以上のように確認すると、「駄込み訴へ」において太宰が作り出したイエス像とユダ像からは、それぞれが自身にしかなし得ない何ものかを持つという自負心の中、ある一つの方向(信仰)の完成へと突き進む純粋な(生)のあり方が示されているといえよう。

注(1) 三上秀吉「太宰治著『女の決闘』『思ひ出』」(『文学者』一九四一・八)

(2) 宮田茂子「太宰治氏の『東京八景』其他」(『近代日本文学の分析』一九四一・一一、霞ヶ関書房)

(3) 「太宰治と聖書」(佐古純一郎編『太宰治と聖書』一九八三・五、教文館)

(4) 山岸外史「人間キリスト記」(一九四一・一一、朱雀書林) 拙論「山岸外史『人間キリスト記』の影響と可能性——

「葉桜と魔笛」を中心に——」(『太宰治スタディーズ』第4号 二〇一二・六)の「三、『人間キリスト記』から「駄込み訴へ」へ」の中で「駄込み訴へ」と『人間キリスト記』の関連性を整理し、その影響の大きさを指摘している。

(6) 菊田義孝「ユダの心——「駄込み訴へ」と山岸外史著『人間キリスト記』」(『国文学第二一巻六号』一九七六・五、学

燈社)

(7) 田中良彦「太宰治と山岸外史」(『太宰治と「聖書知識」一九九四・四、朝文社』)

(8) 木村小夜「『駄込み訴へ』を読む——山岸外史「人間キリスト記」との接点から」(『LIBRARY ichiko』二〇一〇・一〇、文化科学高等研究院)

(9) 例えば、渡部芳紀氏は「ユダの胸中の良心のさえずり」と解釈する。(『「駄込み訴へ」論』『太宰治心の王者』一九八四・五、洋々社)

(10) 北條綾音「『駄込み訴へ』の方法と戦略——語り・主題のアンビバレンス」(『国文』第百一七号 二〇一二・七、お茶の水女子大学国語国文学会)

(11) 陸根和氏は純粹に作品内から「イエスはただの「人の子」として描かれている」と指摘している。『「駄込み訴へ」論』(『実践国文学』第四七号 一九九五・三)

(12) 『新共同訳新約聖書略解』(二〇〇〇・三、日本基督教団出版局)

(13) 高塚雅氏は「駄込み訴へ」を「愛していないながら、その相手をもどうしても許すことが出来ない、その心の葛藤」物語とする。(『太宰治「駄込み訴へ」試論——旦那さまの不在』(『中央文学文学部紀要』第43巻第2号 二〇〇九・三)

(14) 柴田敏氏はユダの裏切りを「見返りを求めるエロスの愛」と指摘する。(『メロスとイエス・キリスト〜キリスト教文学としての「走れメロス」と「駄込み訴へ」』(『静岡英和学院大学・静岡英和学院短期大学部紀要』第四号 二〇〇六・二)